

る保育プロセス（日本版 SICS）」を用い、一人で保育を振り返る作業を試みて保育者 A は、「皆で話し合わないので一人だと保育の見方が甘くなるかも」「確認する作業が一人よがりになっていないか不安」「この自己評価全てを一人でこなしてすることは難しい」「使いやすい部分だけを使うのでは意味がないのでは」と感想を漏らした。一方で、「観点を持って保育を見直すことは自分のためになる」「自分の時間で様式を自由に使えるので気楽」と一人で振り返ることの特性を挙げていた。

D. 考察

保育者 A が個人の自己評価を行うために用いた「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」の汎用性及び継続可能性について考察した結果、以下の知見が得られた。

1. 園内研修・個人研修としての留意点

今回、保育者 A は、自分の都合のよい時間に自分の保育を見直すことを可能にしてくれる自己評価を求めて、自主的に「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」を試行してみた。その結果、改めて園内研修として「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」の意義が明示された。Form B への取り組みが難しかった理由として、保育者 A は分析と言えるほどの多くの視点が自分だけでは出せないことを吐露している。自分自身の書きだしたエピソードに対して他者からの視点が得られないことによって「一人だと甘くなっていないか」「独りよがりになっていないか」といった危惧を保育者 A は抱いたようであり、実践を映像記録におさめられなかったことに対しては「ビデオだけでも主任にお願いして取ってもらえばよかったかもしれない」と回顧していた。これらは園内研修として行った際には出てこなかった視点であり、「この自己評価全てを一人でこなしてすることは難しい」点を指摘したともいえる。また、自分自身で自分の保育を認めほめる作業が保育者 A には難しかったようである。保育者 A のみならず、どの保育者にとっても自分自

身の良い点を自分自身から挙げることは憚られるであろう。園内研修を通して、他者から改善点だけでなく、現時点でよいと思われる点を挙げてもらうことは、保育者の自己肯定感を高め、明日の保育の取り組みへの励ましともなる。だが、この効果は保育者個人が行う自己評価ではなく、園内研修を通しての方が得られやすいことが示唆された。

同時に、個人研修という意味合いで個々の保育者が使用する際の利点が示唆されたことは興味深いと言える。一人で気兼ねなく自分の都合のよい時間帯に自由に使い、ある一定の観点を持って保育を振り返ることは個人レベルでも有意味であると保育者自身が捉えることができた点は新たな知見であった。

今後、自己内対話を充実させていく視点を検討し、盛り込んでいくことで、園内研修及び保育者個人が行う自己研修としての自己評価法の在り方を充実させていくことができるのではないと思われる。

2. Form の特性

今回、保育者 A は、

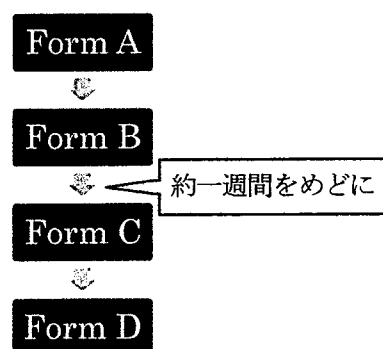


図 1. 「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」実施の手順

という従来の「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」が踏むステップを

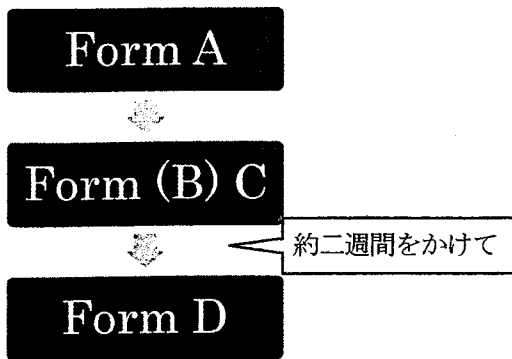


図2. 保育者Aが行った「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」実施の手順

という形で自分なりに変えて用いていたことになった。保育者Aにとって映像記録はとれなかったものの、Form Aを用いての評定はスムーズなものであった。次のForm Bでの取り組みが難しいと判断した保育者Aは、Form AをForm Cを使って分析検証しており、それに基づいて作成したForm Dを約二週間かけて実行に移して保育実践に取り入れた経緯をたどっている。この間、Formの特徴と向かい合いながら困惑する姿から、Form Cの使用法、個人記録だけではなくクラス全体の記録を収めて行くことの必要性、観察記録を基にした保育分析の重要性、そして必要な部分だけを切り取ってFormを使用することへの疑問を提示している。

その後、保育者Aは再度このプロセスをたどっていないため、「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」のFormの特性が、個人向けの自己評価として汎用性を持つかどうか、私用の手順、Formの可変可能性とその影響を含めて検討していく必要がある。

3. 継続の重要性

再度、個人として試行してみるかと尋ねたところ、保育者Aは「Form Cの視点で保育を具体的に見ることで、観点が散らばってよかった」「Form Dに具体的に書き込んでみることで、明日早速できるところから手をつけ始めてみよう、と考える癖がつくのは心強いと思えるようになった」と答えてくれたが、「継続することは難しいかもしれない」

という本音ものぞかせた。その理由として、

- ・ いい点も悪い点も指摘されないので不安が募ってくる
- ・ 他の保育者と分かち合わないで「なるほど」「どうして？」と自分の中での対話が進まず面白みに欠ける
- ・ いつでもできると思うと怠慢な自分が顔をのぞかせる

ことを挙げている。他の保育者と刺激し合っただけの重要性と自己内対話を定着させることが継続への鍵になることが示唆されたと言える。

E 結論

他の保育者と語り合っただけの自己の保育実践の質を高めて行くことを目的の一つとして掲げた、「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」は、園内研修で使用されることを想定して作成された自己評価法であると言える。今回、「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」を用いた園内研修を通して、自己の保育を振り返ることの重要性を体感した保育者Aは、個として「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版SICS）」を用いることで実践の捉え直しをしようと試みた。その結果、個人向けの自己評価法としては、自己内対話を充実させていく視点を検討し、盛り込んでいくことで保育者個人が行う自己研修を支援していける可能性が示唆され、また、園内研修を通して他の保育者と刺激し合っただけで学び、保育者個々が自己内対話を定着させることが自己評価継続への鍵になることが示唆された。

SICS を用いた園内研修の工夫

分担研究者 箕輪潤子（川村学園女子大学准教授）

本研究は、私立保育園 A 園で行われた「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を利用した園内研修から、保育の質の向上においてどのような役割を果たす可能性があるかを検討した。その結果、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園内研修で利用することによって、新たな視点で保育を捉えることができ、それを次の保育につなげていくことができる可能性があることが示唆された。また、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」は実施方法を工夫することができるため、園の実態や特徴にあわせた園内研修をすることができることが示唆された。

A. 研究目的

本研究は、保育所における「子どもの経験から振り返る保育プロセス（日本版 SICS）」を利用した園内研修の実態から、保育の質の向上においてどのような役割を果たす可能性があるかを検討する。

B. 研究方法

2009 年 6 月～11 月にかけて、神奈川県内の A 保育園で行われた「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を使用した園内研修の記録を取り、その記録を踏まえて考察を行う。

C. 研究結果

1. 「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を利用して園内研修を行うまで

A 保育園では「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園内研修で利用する前に、理念や方法を保育者に理解してもらうための工夫を行っている。

それは、理念や方法についての説明を何段階かに分けて行っていることである。最初に、園長から主任に対し「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の紹介を行い、理念と「安心度」「夢中度」について理解してもらう。次に、主任からクラスのチーフに対して説明を行い、付属の DVD を視聴

して評定と話し合いをしてもらい、取り組みについて理解してもらう。最後に、クラスのチーフから各クラスの保育者に対して説明を行い、実際の保育において「安心度」「夢中度」という視点をもってみる。

このようにいくつかの段階を踏み、説明されたりしたりを繰り返すことによって、保育者たちが「子どもの経験から振り返る保育プロセス」に興味を持ち、主体的に取り組んでいこうという姿勢が生まれたという。そして、全体での園内研修を行う前から、「安心度」「夢中度」という視点で保育を見る取り組みが繰り返されるようになっていく。

2. 園内研修（1回目）

<参加者>

園長、主任3名、クラスチーフ

<エピソード提供者>

主任2名

<研修における課題（園長・主任より）>

園長から：A 保育園で SICS を取り入れたら、どのようなかたちになるかを具体的に検討してみたい。安心度・夢中度をはかることが目的ではなく、あくまでも保育の質の向上に向けての取り組みである。質の向上のためには評価と記録を欠かすことができないことから、具体的な評価の方法のひとつとして、取り組んでみたい。

主任から：子どもたちの表情や、周りの環境などを考えながら、安心度と夢中度を評定するところまでをやってみた。FormA をどんな風には書けばいいのかかわからず、戸惑った。そこで、具体例に倣って記入を行ってみた（場面の時間帯、場面にかかわっている子どもの名前、遊びの状況、保育士の予想、子どもの性格、遊びがどのように展開していったか等）

<研修の流れ（概要）>

(1)エピソード（formA に記入）について、全員でDVDを視聴

(2)エピソード提供者が解説を行う。

(3)再度DVDを見直す。

(4)参加者全員でエピソードについて話し合う。

※4つのエピソードについて(1)～(4)までのプロセスを繰り返す

<研修の流れ（実際の例）>

(1)DVDの視聴

(2)エピソードの紹介

子ども：Bくん

時間：夕方

場面：室内。机で、他の子二人と話している。机の上には画用紙、ペットボトルとクーピー。ペットボトルに入れていたクーピーを取り出す。隣の塗り絵をしている子に話しかける。クーピーを数本手に持って、空気に絵を描くようにして手を動かす。何か歌を歌っている？表情は、さながら歌手のように熱唱している様子。

保育士が、塗り絵などができるように用意してある空間。戦隊ものの遊びをしているらしい。色は、いわゆる戦隊ものの5色。歌は主題歌。評定：<安心度>塗り絵はしていないが、彼の世界に入っている。リラックスしていて、満足そう。→5 <夢中度>楽しそう→5

（主任からの補足・感想）こういう場面は、自分が保育に入っていると、通り過ぎてしまう。でも、こうしてじっくり見てみると、今までになかった発見があって、良い機会だった。日本版SICSの意図している安心度、夢中度とは違うかも知れない

が、A園としてはこれでいいのではないか。A園の特色というところで、さらにプラスすると、家から持ってきたおもちゃという安心材料になっていたのでは。家から持ってきた恐竜とウルトラマンのおもちゃが傍に置いてあったことで、安心度が高まっていたのではないか。A園の取り組みの良さが見えてきた。Bくんの表情がすごく良い。

(3)DVDの再視聴

(4)話し合い

- ・自分があの場にいたら（確かいたのだけれど）、気付かなかった！日頃からBくんは、家で戦隊もので遊んでいると思う。あそこだけを取り出してみると、こうして映像で見ると、ひとつひとつに意味があるんだなと気付く。きっと箱は基地、ペットボトルは戦隊の乗り物。視点が変わる。

- ・Bくんは、去年から歌を歌ったり、歌いながらジャンプして飛び降りたりとかしていた。DVDを見たとき、エピソードの解説を聞くまでは「夢中度は5？」と思ったが、あらためてそういう視点で見ると、第一印象が変わり、見方が変わる。

- ・朝、不安そうな顔をして来て、安心するまで時間のかかるお子さんという意識があった。こういう場面をじっくり見てみると、安心しているんだなとわかる。

- ・集団の雰囲気が良かった。一見ごちゃごちゃしていて、もしかしたら、保育士が「ほら、片付けるよ」と入ってしまう場合もあるかも知れないが、A園では、そういうことをしない風土があるから、こういう場面が保障されたんだなと思った。

- ・安心度・夢中度を何のために評定したのかということ考えた。この場面は、声をかけてしまいがちな場面だが、こうして見ることで、安心してるんだ、夢中なんだということが分かるので、今取り組んでいるのは意味があるのかなあ（肯定的なニュアンスで）と思った。

- ・私たちは、クーピーで塗り絵をする場所は「塗

り絵をする場所」、おままごとをする場所は「おままごとの場所」という意識があった。しかし、年齢にもよるが、組み合わせることも見立て遊びが豊かになることにつながりうる。私たちがどういう風にかかわるか、どんな言葉がけをできるかを、考え直させてくれる場面だった。この後2つのエピソードについても話し合いが行われた。

<研修の感想>

- ・ 自分たちの園のお子さんということで、その子の性格などわかっているつもりだったが、実際に(解釈を聞かずに)エピソードを見てみると、わからないことも結構あった。あらためて、考え直す良い機会だった。
- ・ 保育の何気ない一場面が、大切な時間なのだとあらためて感じた。このように何か視点を持って保育を見ていくことを大事にしていきたいと思った。
- ・ 客観的に映像として見て、どうしたらよいか、こうじゃない場面ではどうということが考えられるかを、また考えることができるなと思った。
- ・ 子どもの性格や家庭の背景を知っていることでできるかわりもあつたが、逆に思い込んでいた部分もあつて、こうして一歩引いて見てみることも大事だと思った。
- ・ 主任：自分の振り返り、園としての振り返りとして有効。安心度・夢中度は、あくまでも尺度のひとつ。A園としての保育をさらに良いものにしていけるように考えていきたいなと思った。みんなで「あはは」「面白いね」と笑いながら見れる時間も、すごく良いなと思った。映像を編集していて、すごく嬉しかった。
- ・ 「こんなことをしてたよ」って、保育士同士で共有するのもいいなと思った。
- ・ 客観的に見るって、本当に大事。子どもたちが夢中になって、遊んでいる姿を見ることができて、私たちの保育も良いなと思った。5だけじゃなくて、2とか3の場面について、どうしていったら良いかなと考える機会になる。気を引

き締められた。

- ・ (エピソード提供者) 楽しかったです。ひとりひとりを追えることが楽しかった。こんなことが楽しいんだ、とか、心の内面が見えてきたり。安心度・夢中度を見ていくが、それを評定することで何をしたいのか、そのあたりの目的をみんなでも共有していくことが大事なのではないかなと思う。
- ・ (園長) みなさんのお話を聞いていて、すごく興味深かった。語り合う楽しさを、他の職員に対しても、どうやって作り出せるかなと考えながら聞いていました。

2. 園内研修 (2回目)

<参加者>

園長、主任、クラス担任

<エピソード提供者>

クラス担任

<研修の流れ (概要) >

- (1) DVD 視聴
- (2) グループごとに話し合い(1グループ4~5人)
- (3) グループごとに意見発表(安心度・夢中度の数と理由) 1分ずつ
- (4) アドバイザーの話
- (5) グループごとに意見発表 (明日の保育への取り組みについて)

<研修の流れ (実際の例) >

(1) DVD 視聴

子ども：Cくん (5歳)

時間：長時間保育、

場面：スズランテープを自分の好きな長さで切り、縦に裂く。「長くて細い紐がコマに適している」ということを、それまでの活動の中でわかっている。それを紐の代わりにしてコマに巻きつけ、実際に回してみる。→回る。友達に「バトルしよう！」と持ちかける。回した後、ロッカーにしまいに行く。

(2) グループ(1グループ4~5人)ごとに話し合い

(3) グループごとに評定とその理由を発表

グループ1

- ・ 年長クラスはハサミなどを好きなように使えるように常備してあって良かった
- ・ コマの紐の長さを調整している様子→日頃の経験から長さの目処をたてながら調整していたのでは。
- ・ 保育士が不必要に声をかけなかったことで、Cくんや他の子どもたちも、自分で工夫しながら遊んでいたのでは。

グループ2

- ・ 夢中になっているが、途中で視線が反れている様子から4では。
- ・ 表情がもともと豊かではない子なので、表情からはわかりにくいですが、安心して遊んでいるように見えた。

グループ3

- ・ はじめの様子や、友達をバトルに誘っている
- ・ ……が、継続してコマを回すということでは4に近い。机の上など他の場所でも試したりしていたら5に近くなるのでは。

グループ4

- ・ 表情がとても豊かで笑顔ということではないが、自分でやりたいことを工夫しながらやっているから安心度はほぼ5
- ・ お迎えの時間でもあり、入口の方の声を気にしたり、カメラを見たりということはあったが、自分のやりたいことを目的を持っている

グループ5

- ・ 常備されているものなどを使い、リラックスして自然な状態であった。
- ・ 笑顔がたくさん見られるわけではないが、真剣な表情で、安心して行っているようだった
- ・ 夢中度は、もう少しで5になるのではという意見。環境を変えてあげる(机を動かしてスペースを確保するなど)

(4)アドバイザーの話

(5)グループごとに意見発表(明日の保育への取り組みについて)

- ・ 保育士の言葉かけなど人的環境、がやがやしている・隣が近くてぶつかるなど物的環境の大

切さ(その子の内面の読み取り)

- ・ 受容が大切。その子が何を考えているのかなど、意味を読み取ってから、その先どうなるかも考えながら、言葉をかけることの大事さを感じた。
- ・ 時間帯によって、保育のあり方も変わってくる。特に長時間保育では、リラックスして安心した精神状態でいれば良いと思う。遊びに入れず、一人でごろんとしている子がいれば、(リラックスしていれば)いい。その子の好きなこと・嫌いなことも考慮に入れながら、誘う言葉かけをすることも考えられると思った。
- ・ 日中と夕方では、保育の視点が違うとあらためて感じた。言葉かけのタイミング、見守るという選択、きっかけ作りなどをしていける。
- ・ ビデオを撮ってもらえると、自分の保育を客観的に見ることもでき、考え直すことができる。
- ・ ビデオを通して、保育を冷静に見ることがができる。長時間保育では、あまり集中されてしまうと帰られなくなるため、主活動とは違う必要性がある。今日見た事例くらいの夢中度でも良いのかも知れないと思った。
- ・ 今回は5歳児、4歳児だったが、他の年齢ではどうかかなと思いながら観ていた。毎日の保育では流れてしまう部分もあるので、自分の保育について他の先生の意見を聞くことで、保育をどうしていったらよいかを考えていくことができるなど改めて感じた。
- ・ 子どもたちの日々の関係性も考慮しながら、その場면을捉えることの重要性。ビデオを見ることで、子どもたちをみる目を養うことができるなど思った。
- ・ 撮影していて思ったのは、その子の世界に入り込めることが楽しかった。「この子のこの行動には、こういう意味があったんだ!」という発見。日々の保育では、子どもたちの安全を配慮したり、忙しい、忙しいという状態。2

分間じっと見るということもできない状況なので、ビデオを撮ることで、じっくりその子の様子を見ることが嬉しい。そうして、立ち止まり、じっくりと考えることで、その後の保育についてまた考えることができると思った。

D. 考察

A 保育園で実施した「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を用いた園内研修から、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」が保育の質向上においてどのような可能性をもつか考察する。

1. 「安心度」「夢中度」から新たな視点へ

「安心度」「夢中度」から保育を捉えてみることや、捉えたことを他の保育者と分かち合うことで、保育者自身がどのような視点で保育を見ているのかということに気づくと共に、新たな視点に気がつく可能性があると考えられる。

2. 「よいところ」や「らしさ」の発見

A 園の2回の研修では、研修を進めていくなかで「A園らしさ」「私たちの保育っていいかも」という声がかかれた。研修で取り上げるエピソードを、夢中度や安心度が低いものだけでなく高いものも選ぶようにすることと、FormBに「よかったところ」を書く欄があることによって、反省点だけでなく、自園の保育や他の保育者のよいところや、大切にしていることを捉えることができる可能性がある。また、よいところに気づくことによって、研修の内容を保育につなげていこうという意欲が保育者の中に生まれる可能性がある。

3. 園の実態に沿った研修のあり方へ

A 保育園では「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を、実施要項通りに行うのではなく、園の特徴や実態に応じて工夫を行い実施していた。まず、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の理念や考え方を理解することに重点を置き、すぐに全体の園内研修で利用するのではなく、園長から主任、主任からクラスチーフ、クラスチーフからクラス担任へと段階を追って SICS の理念や

考え方を伝えていた。ただツールとして利用するという形ではなく、理念や考え方を理解することに時間とプロセスをかけることで、理念や考えが丁寧に理解されるだけでなく、保育者たちが自主的に取り組もうとするようになっていったという。

次に、FormAのエピソード記録と合わせて、DVDの映像を用いていた。A園ではビデオ映像を用いた研修がよく行われてきた。記録をとることや記録を用いた研修については、これからどのように実施していくかを話し合っているところであった。記録と映像の両方を用いることによって、記録のエピソードについてより具体的なイメージを共有することができたという。また、その場にいるような気持ちになりながら客観的に見ることができたようである。

そして、参加者によって、研修の進め方を変えていた。1回目は園長・主任とクラスチーフの少人数だったため、全員で机を囲むという形式を取っていたが、2回目はクラス担任の殆どが参加しており人数が多かったため、小グループで話し合いをした上で発表するという形式をとっていた。また2回目の小グループは、違うクラスの保育者と一緒になるように組まれており、他のクラスの保育者の見方を知ることができるようになっていた。

第四に、司会の先生や園長が評定についての考え方を、研修中何度も補足として繰り返していた。また、子どもについて話し合うことを楽しむ雰囲気大切にしておき、保育や子どもの批判をするのではないことや、よいところを見つけることなどについても補足していた。

A園が様々な工夫をしながら研修を行っていたことから、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」は保育所の実態や必要に応じて工夫をしながら研修を行うことが可能であることがわかる。工夫をしながら進めることが、園の実態に沿った園内研修のあり方を考える機会となる可能性もあるのではないだろうか。

E. 結論

「子どもの経験から振り返る保育プロセス」を園内研修で利用することによって、新たな視点で保育を捉えることができ、それを次の保育につなげていくことができる可能性があると考えられる。また、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」は実施方法を工夫することができるため、園の実態や特徴にあわせた園内研修をすることができると考えられる

保育者養成大学の学生の指導への活用

分担研究者 野口隆子(十文字学園女子大学)

本研究は、4年制の保育者養成大学の学生に対し「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の尺度を利用した指導を実施し、学生の子どもを捉える視点の変化と尺度の有効性や利用可能性について、記録をもとに検討をおこなった。尺度を用いた他者との話し合いの過程を経験することで、視点の違いや話し合いへの興味関心が示された。また、新たな子ども理解や自分の視点の振り返り、視点の相対化、話し合いの重要性に関する指摘があがり、多くの学生において有効性が示唆された。同時に学生にとっての困難さや課題もあげられ、保育者を目指す学生の学びの特徴をふまえた指導のあり方が示唆された。

A. 研究目的

本研究は、保育者養成大学の学生に対し「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」を利用した指導を実施し、学生に対する尺度の有効性と利用可能性を探る。さらには学生の学びの過程を踏まえた指導のあり方について検討することを目的とする。

B. 研究方法

2009年7月、4年制保育者養成大学の3年生79名を対象とし、「子どもの経験から振り返る保育プロセス」の尺度とビデオを用いた指導を実施した。学生はすでに幼稚園・保育所などで部分的に観察実習などを経験している学生である。

個人の記録と少人数グループによる話し合いの記録、尺度に対する自由記述について検討した。

C. 研究結果

1. 指導のプロセス

数度に渡る講義形式の指導の中で、保育の質と改善に関する動向や様々な保育の環境尺度について紹介し、その中でSICSと「子どもの経験から振り返る保育プロセス(日本版 SICS)」についてとりあげた実践である。以下、指導の流れについて記す。

<① 導入>

SICSのWell-being(安心)とInvolvement(夢中)の観

点から子どもの経験のプロセスをみていく教育思想について説明し、その方法や日本版SICSの独自性について解説をおこなった。安易に評定を実施し数値化されるのを避け、意味について考えた上で「子どもの経験から振り返る保育プロセス」にとり組むことで学生にとって意義ある視点を養うことを主たる目的としている。

<②実施>

まず学生は3~4名程度の少人数グループに分かれ、練習用のビデオクリップを見ながら子どもの「安心」と「夢中」について評定を試みた。

次に配布された記録用紙を用いて、3つのビデオクリップを見てクリップごとに個人が評定を実施し、なぜその評定にしたか理由を自分なりに考えて記録してもらった。そしてグループでその評定と理由を見せ合い、話し合いをおこない、グループで再度評定を試みた。

グループでの発表を実施し、グループ間の意見を聞きあった。

<③まとめ>

終了後、SICSの全体の流れを紹介し各フォームの説明やSICSをめぐる現場の論点、保育者が保育の場で園内研修として利用している事例等について簡単に解説した。

2. 記録の検討

学生個人が評定と理由、そしてグループの話し合

いによる評定と理由を記録してもらった(資料1に記録の一部抜粋を掲載する)。

安心と夢中に着目するというのは学生にとって新たな試みであり、ビデオに映る子どもの姿を尺度の軸にあてはめてみることで様々な気付きが生じたようだ。また、学生同士の話し合い後に、評定値が変わった者もいた。例えばNo2の学生は最初に「周りの子どもの様子を期にするが、網を持って遊ぼうとしている(評定4)」とし、話し合いを通して「遊びたいという気持ちはある。道具の使い方がわかってない?表情がはっきりしてない(評定2)」と大きく変化していた。表情や内面の読み取りにおいて新たな観点を持ったことがわかる。評定による数値が同じ場合でも、学生同士の話し合いによって自分一人では気がつかなかった点について気づいたり、他者の観点から学んだり、自分の視点が他者と同じか確かめたりしているようであった。

3. 自由記述の検討

最後に自由に感想を書いてもらったところ、79名中40名の学生が「面白かった」「楽しかった」と述べていた。どういった点に面白みや楽しさを感じたかを検討するため、記述内容からカテゴリーを作成した(資料2参照)。

まず多くの学生があげていたのが、「視点の違いについて」であった。同じビデオを見ても、学生同士で見合うと捉え方が違い、比較ができる点に興味を覚えたようである。同時にSICSの軸で子どもをみると「視点が共有」できたということにも面白みを感じたようだ。その他、話し合ってみると全く別の捉え方になった、話し合い自体楽しかった、など、「話し合い」が面白いということや、尺度によって子どもの様子を見る観点を提供され、考えることに興味をもてたとするような「わかりやすさ」の点もあがっていた。

しかし、難しい、大変だという指摘もあった。同様にカテゴリーにまとめた。まず、見るクリップによって難しさが違うという「場面による評定の難しさ」があがっていた。そしてSICSで用いられる安心や夢中の「評価基準の理解」が難しいという声もあった。基準が自分の観点と違うことに疑問を持ったり、これだけでは判

断ができないと述べていた。特にビデオクリップの瞬間から判断することについて難しさを感じた者が多かったようである。ビデオの背景や子どもの日々の生活の流れ、関わりの中から子どもの振舞いや表情が読み取れるので「短時間・一場面での判断」が困難だという声があった。また「動きや表情の読み取り」、保育の場で実習などをするとき自分が果たして子どもの姿を読みとって判断し行動できるのだろうかという「実践に向けての不安」も少しあがった。

その他の意見では、「視点の相対化」について、「子ども理解に向けた気付き」について、自分はこういうふうにも子どもを見ているのだと気付く「自分の視点の振り返り」について、ビデオを見た後におこなう「話し合いの重要性」について、述べられていた。

尺度(SICS)に対する感想として、「軸があることでわかりやすい」、「スケールとしておもしろい」というプラスの意見や、何かしら気付いたり学んだりすることができたという意見が出されていた。

D.考察

尺度は子どもの姿を見る視点として学生に興味をひきおこし、多角的な視点をもたらすものとして有効に作用することが示唆された。子どもの姿をとらえるための参照枠となるようなものを学生は持っていないため、SICSで示される基準を理解し、判断の材料にしていくことが可能となるようだ。特に、自分一人では気付きにくい事柄は他者との話し合いを通して気づいたり確かめたり、納得しあったりするやりとりが促された。

今回参加した学生は、抵抗なくグループ活動に参加できた者が多かったようだ。「人によって見方が違うことが面白かった」「独りよがりな視点から脱却できるきっかけになると思った」など、他者との意見の違いから学ぶことが可能だったが、そのためには話し合いやグループ活動をある程度経験し、慣れている必要があるだろう。例えば一人の学生が「みんなと意見が異なり焦った」と述べていた。導入の時点ではあらかじめ人と視点が違っていてもその違いから話し合ってみようという説明していた。自分の見方に自

信がない場合やグループでの活動に苦手意識をもっている場合に、自分では考えずなるべく人にあわせようという意識が働くかもしれない。学生のそれまでの学習経験や個人差に配慮することが必要だろう。

E 結論

尺度を用い、他者との話し合いの過程を経験することで、視点の違いや話し合いへの興味関心が示された。また、子ども理解に向け新たな気づきや自分の視点への気づき、視点の相対化、話し合いの重要性に関する指摘があがり、多くの学生において有効性と利点が示唆された。同時に学生にとっての困難さや課題もあげられており、保育者を目指す学生の学びの特徴をふまえた指導のあり方が示唆された。

OECD 諸国における保育の質と評価に関する動向 1

主任研究者 秋田 喜代美 東京大学大学院教育学研究科教授

本研究は、OECDの Starting Strong Network 等で保育の質に関して何が課題として議論されているのか、また何がそこで各国の保育政策において質の維持向上のためにどのようなインセンティブが報じられているのか。また保育の質に関する欧米で研究レビューから議論した。まずOECDは保育の質についてこれから取り組むべき点として4つの課題を上げている点、また国レベルでの方向性の質、2つのカリキュラムの伝統に伴って構造の質、保育過程の質、操作性の質、成果の質が異なってくることをレビューを通してまとめた。

A. 研究目的

OECDならびにOECDに関わる研究者等が保育の質について何をどのように論じてきたのかを整理することで、日本において保育の質を論じるうえで考慮すべき課題を捉える。

B. 研究方法

OECD (2006) Starting Strong² ならびにOECD (2007) の保育の質に関するワークショップおよび近年の保育の質に関する論文を整理する。

(OECD各国レビュー要約に関しては淀川裕美さん(東京大学教育学部)の協力を得た。)

C. 研究結果

1) OECDが問う保育の質に関する課題
OECD (2006) は国際レベルにおいて、保育の質に関して今後問うべき問題として4つの課題を挙げている。本研究プロジェクトでは3, 4の課題を考えていくものであるが、1, 2の視点のもとに問われるべき課題であると考えられる。

1 3歳未満の乳児に対する特別高い関心
3歳未満は多くの保育機関が私立であったり無認可であったりする。職員のトレーニングや教育的プログラムが特に弱い。

3歳未満の子どもに対し親の出生前、出産、出産後の条件に焦点をあてたサービス
家庭環境の質—親プログラム、家庭訪問サービス、ポートフォリオの使用。

保育の認知発達への肯定的謳歌が言われる一方で、否定的結果も示されている(カナダ) 0-3歳は幼児をケアに入れるのにふさわしい時期ではないのか、ケアの質が低かったのか。文化か労働政策か 一人親家庭に対して母親によって育てられるべきか、質のよい機関であれば預けて働くべきか。親の選択によって質は向上するか、競争とイノベーションで質は向上するか

3歳未満で保育機関にいる子どもの割合は、OECDデータでデンマーク 61.7%, アイスランド 58.7, ノルウェー 43.7, スウェーデン 39.5, ベルギー 38.5, フィンランド 35である。日本は 15.2、韓国は 19.9である。
2 早期からの教育なのかソーシャルペダゴジーか

より教師中心でより学業志向のカリキュラムや方法か、より地域に根ざした、子ども中心のホリスティックなカリキュラムか。

3 幼児養育において有効な質の指標とは何か

一人当たりの施設の空間、子どもと職員の比率、カリキュラム枠組みか、職員の資格と専門的職能教育

4 質を改善していくための手段

評価（ドキュメンテーション、自己評価、形成的な評価など）、保護者やコミュニティの関与

2) STARING STRONG NETWORK 参加国にみる保育の質

1 ベルギー（フランドル地方）

教育省は、2007年から2008年にかけての年度を“就学前の子どもたちの年”と位置付けた。この年度は、特に幼児教育に焦点が当てられ、早期の保育園（nursery school）入園の重要性が唱えられている。すでにさまざまな取り組みが行われている。例えば：

- ・ 生徒指導センター（pupil guidance centres）が就学前の子どもたちの登園状況により注意を向けるよう促す（ただし、就学前は義務教育には含まれてはいない）

Kind en Gezin との協力のもと、教育省が情報収集を行い、子どもを保育園に通わせていない保護者に対して家庭訪問を行う。

教師など教育の専門家だけでなく、一般の人々もが幼児教育の重要性を確信できるよう、意識向上のためのさまざまな活動に取り組む。

フランドル政府は、数年の間に、Kinde en Gezin での幼児教育のあり方を以下のようなかたちで改善したいと考えている：

フランドル地方に住むすべての子どもたちが、支払い可能な保育料で、家から通える範囲内で保育を受けられるようにすること
すべてのチャイルドケアセンターが共通の明確な目的を持ち、保護者や子どもたちにとって安全で信頼できる場となること

すべてのケアセンターで均一に良い質の保育が保証されるようにすること（現段階では、補助金を受けているか否かによって、保育の質の基準に差がある）

すべての地域で、その地域ごとの要求に応じて、保育における3つの主な機能（経済的機能、教育的機能、社会的機能）が満たされるようにすること

保育における3つの主な機能（経済的機能、教育的機能、社会的機能）の重要性が政策レベルで認識され、いずれにも同等の価値が認められるようになったことは特筆に値する。

2007年5月には、地域ごとに協力して、これら3つの機能を満たせるよう支援するための、16の先駆的プロジェクトが開始された。特に、誰もが保育を受けられるよう保証することは、その最も重要な目的のひとつである。また、共働きの家庭、父子家庭や母子家庭、低所得層の家庭などに対しては優先的に保育を受けられるよう配慮しなければならない。さらに、保護者からの要求を記録し、より適切にそれらの要求に応えられるよう、システムを確立する必要がある。このプロジェクトは2008年9月に評価され、その結果は新しい法律制定の基盤として用いられることになっている。

2 カナダ

カナダでは、地域州政府ごとに、幼児教育および保育の質に関する管理責任が任されている。カナダ連邦政府は、First Nation program 以外については、質に関する議論に介入しない。ただし、それぞれの地域で幼児教育および保育を提供できるようにするため、財政的支援は行っている。

2006年には、Universal Child Care Plan が

発表され、その中で Universal Child Care (以下、UCC と表記) による保育施設への支援や給付金についても触れられている。UCC 給付金制度では、6 歳以下の子ども一人あたり月 100 ドル給付されている。なお、低所得層の家庭の場合は taxable である。年間の給付金の総額は、24 億ドルにおよぶ。

2007 年からは、保育施設の創設および質の向上のために、カナダ連邦政府から地方政府へ年間 2 億 5 千万ドルが支給されている。また、従業員が利用できる保育施設を新たに設ける企業に対して、25%の投資税額控除 (1 施設につき最大 1 万ドル) を行うとした。

また、地方においても質の向上に関する先駆的取り組みを行っている (The Alberta Accreditation Program, The Manitoba Strategy and Quality Framework, The Ontario College of Early Childhood Educators, Quebec)。

3 アイランド

“Siolta” - 幼児教育および保育の質に関する枠組み：

2002 年から 2005 年にかけて、幼児期の発達および幼児教育のためのセンター (CECDE, Centre for Early Childhood Development and Education) が、国家基準の質に関する枠組みを開発するために、幼児教育施設および保育施設の関係者との長期にわたるコンサルテーションを実施した。その結果をふまえ、より質の高い幼児教育を提供することを目的として、教師が実践の改善のために既存の方針や基準と並行して用いることのできる “Siolta” という枠組みが、2006 年に作られた。この枠組みは、生後から就学前までの子どもたちの保育と教育を行う施設で、公式あるいは非公式の

評価を実施する際に参照する枠組みとしても用いられる。ここで言う保育と教育を行う施設とは、民間の非公認の保育施設、幼稚園、プレイグループ、託児所 (creches)、保育所など、あらゆる施設を含む。また、小学校で行っている幼児教室も含まれる。

“Siolta” では、幼児教育および保育における質の良い実践とサービスに関して、基準としての 12 の方針 (principles) を挙げている：

1. 幼児期は、子ども自身のもつ権利として大切に育まれ、尊重され、価値を認められ、支えられるべき人生における重要で特別な時期である
2. 子どもひとりひとりの個性、能力、権利、そしてニーズは、幼児期における質の良い経験を提供する上で核となるものである
3. 保護者は子どもにとって最初の教育者であり、彼らの幸福感 (well-being)、学び、発達を促す上できわめて重要な役割を担う
4. 子どもたちの幸福感、学び、発達においては、応答的で感受性豊かな互惠的関係性がいつでも維持されていることが必要である
5. 質の良い保育および幼児教育において、平等性は不可欠な要素である
6. 質の良い保育および幼児教育とは、多様性を認め尊重し、すべての子どもと家族がそれぞれの個人的、文化的、言語的アイデンティティを持つことを保証するものである
7. 子どもの身体的環境は、幸福感、学び、発達に直接的な影響を与える
8. 子どもたちがかかわるすべての環境において、すべての子どもの安全性、福祉、

- 幸福感が守られなければならない
9. 幼児期における質の良い経験を提供する際、そこでの大人の役割がすべての基礎となる
 10. 幼児期における質の良い経験を提供するためには、協力、コミュニケーション、相互の尊重が求められる
 11. 幼児期の教育方法は、子どもの発達や学びに関して包括的なアプローチを取るかたちで、カリキュラムや活動計画として示される。それは、保育と幼児教育が本来はふたつに分けることのできないものであることを反映するものである
 12. 遊びは、子どもたちの幸福感、学び、発達において核となる

この12の方針は、以下の16の項目に関連する基準(standards)と並んで位置づけられる：子どもの権利・環境・保護者および家族・コンサルテーション・相互交渉・遊び・カリキュラム・計画と評価・健康と福祉・組織・専門的実践・コミュニケーション・アイデンティティと所属感・認可と規制・地域の参加

乳幼児期の学びのための枠組み

2004年に国のカリキュラムと評価委員会が発刊し、家庭から園へ、園から学校への発達と学びの連続性と発展を目的にした枠組みを提出している。あらゆる学習は、さまざまな内容分野の学習と発達が同時に生じるという信念に基づいている。個々の子どもを領域別に発達をとらえるというよりも、Well-being(養護)、アイデンティティと所属感、伝え合う、探究と思考という主題をつかって書いているものである。

そして子どもの学びを支援するためには「子ども同士の相互作用」「保護者や家族とのパートナーシップ」「学習や発達を支えるものとして遊びを用いる」「子どもの進歩を捉え、学習の次のステップを計画する」という視点から実践支援を行なうと考えられている。

4 ポルトガル

OECDのレビューではシステムのあらゆる点で改善が必要とされている。政府は助成金を施設に出しているが、必ずしもその達成や成果の指標をもとめてこなかった。このレビューに応じて査察官が公立幼稚園や小学校ではスパービジョンを行なうようになってきている。そこでは初等教育政策の充実のために“Agrupamentos”と呼ばれる幼児教育と小学校教育のネットワークによって開発されたものである。558の公立幼稚園をふくむ64の“Agrupamentos”で教育活動の計画やカリキュラム経営等がなされてきている。

説明責任、評価、監察の文化を作り出すために、政府は園のカリキュラム評価のシステムを開発してきている。2005年と2006年に、ESSE(効果的學校評価)プロジェクトに取り組んできている。このプログラムが焦点にしている鍵指標は、ヴィジョンと方略、教育リソース、教育過程、成果である。各指標で教師が自分の実践を評価し、生徒の進歩に関するデータが集められる。

政府が取り組んでいるのは以下のプロジェクトである。

1 EEL 効果的な学習プロジェクト
英国に学んだものである。

2 ドキュメンテーション 初年度がポル

トガル語、算数、実験科学、ICT。

3 デイケアセンター、インファントホーム、一時保育の質改善

5 オランダ

質保証の枠組み

2005年1月に質の統制メカニズムとして従来から各市で使われていたものにかわって、新Child Care Actによる一般的な規制に変わっている。ここでは政府はチャイルドケアセクターについて民営化と保護者による自己選択制を導入してきている。規制緩和によって行政負担は減っている。

ACTは保護者に対して質に関する基本情報を開示するよう義務付けている。今ではそれによってChild careは社会的に重要な位置をえるおとになっている。地方レベルでは基本的な質の基準は、プロバイダー、施設と親によって契約がかわされた形での自己評価によって定式化されている。4-6歳の教育部門では質の統制は、学校の査察官によって行なわれ、それが学校が親に対して教育的説明責任をとれるような形で進められている。

カリキュラムと教育方法

オランダの教育ではすべての学校種においてナショナルカリキュラムはない。しかしこの10年に2.5歳から6歳までの教育に関しては特に低経済階層のマイノリティのための質の改善のためにカリキュラム改善に取り組んできている。2つのカリキュラムPyramideとKaleidoscopeが妥当なものとして認証され使用されている。特に移民のためのオランダ語習得のカリキュラムの改善が2004-2005年にかけて行なわれてきている。新カリキュラム

は2006年から実施され0-4歳の教育カリキュラムが作られてきている。

教育的な恵まれない子どもたちへの保証政策

4歳以上のところでの教育的支援が十分受けられない子どもへの説明し責任が実施され、2010年までに110ミリオンユーロが毎年自治体に投入され、2010年までの合計額は210ミリオンユーロとなる。就学前教育は主にプレーグループでおこなわれ、ケアセンターでのものは少なくなる見通しである。質の保証のために幼児教育は以下の基準を満たすことを求められている。

- 1 保育者は有資格者でなければならない
- 2 1年間1週間に最低三日間は行われる教育プログラムでなければならない
- 3 可能な限り、仕事は証拠にもとづいて実施されなければならない。

2009年までに上記基準に70%の子どもが到達する予定である。2007年現在で53%達成状況である。政府は幼児教育に対して、2007年-2008年、2008年-2009年に45ミリオンユーロの追加予算を財政投資する予定である。

子どものオランダ語習得を促す

初期から言語的にこの点で問題を抱える子どもに対して重要な方略である。プレイグループにくらべてデイケアセンターではこの点で弱い状況がある。

言語発達促進プログラム

現在の教育プログラムは言語教育以外は十分な効果が発揮されているため言語教育

に特化したLanguage Route というプログラムが用意され2006-2006に2200人のインファントスクールの教師がこのプログラムの研修を受けた。

他のイニシアチブ

地方養育委員会の指導主事のスーパーバイズ機能の強化

評価監察集団の一体化：現在 地方教育委員会はArea Health Authority, PSES 2箇所からの観察を受けているためのその一貫化した視察 Education Inspectorate への統合発展改善が検討されている。

学校外ケアを提供するための、学校とデイケアとの協力の推進。2007年より登校前、後の時間に保護者の希望によりケアが提供されるように新たな法律が定めている。多くの場合は学校内で地域のデイケア組織がケアを提供している。このような形で政府が学校とデイケアセンターの連携協力を進めており、保護者にとってデイケアセンターがより使いやすいものとなっている。

以上に報告した5カ国以外に、OECDの保育の質レポートではスウェーデン、ノルウェー、イギリスが論じられている。科研報告の本稿ではこれまで日本で十分に紹介取り上げられることのなかった上記5カ国をとりあげてその政策インセンティブをまとめている。

なお上記レポートは2007年11月のOECD starting strong network ワークショップ レポート [reporthttp://www.startingstrong.net/](http://www.startingstrong.net/) に基づきそのポイントをまとめたものである。

OECD諸国における保育の質と評価に関する動向 2

分担研究者 鈴木 正敏 兵庫教育大学学校教育研究科准教授

保育の質と評価については、日本のみならず世界各国の保育政策の課題となっている。それぞれの国において、質の高い保育をどれだけ提供できるか、そして質の向上を図るためにはどのような評価システムが妥当であるか等について模索されている。そこで本研究では、OECDのStarting Strong (Early Childhood Education and Care) Networkで議論された、海外での保育の質と評価に関する動向について報告する。

A. 研究目的

本研究では、OECDのStarting Strong (Early Childhood Education and Care) Networkでの議論を踏まえ、海外での保育の質と評価に関する動向について分析を行い、日本における保育の質の向上に向けた研究への示唆を得ることを目的とする。

B. 研究方法

平成20年10月30日・31日にパリで開催されたOECDのStarting Strong Network会議での各国からの発表のうち、日本の保育政策に示唆を与える内容について分析を行った。

C. 研究結果

1・OECD諸国全体における保育の質と評価に関する動向

Simon Chapple氏によれば、OECDのDirectorate for Employment、Labour and Social Affairs (DELSA)による保育の質に関する政策的な動きをまとめた報告書が出されるようである。その内容は概ね以下の6点にまとめられる。それらは、1) OECD諸国における子どもたちのウェルビー

ングに関する比較、2) 社会が子どもにどれだけ投資をしているか、3) 3歳以下の子どもたちに対する政策がどのようになっているか、4) 一人親による子どものウェルビーイングに対する影響の現状、5) 世代を超えた不平等の持続に関する知見、6) 政策に関するまとめ: どのように子どものウェルビーイングを向上させるか、である。

この中で、特に注目されているのが、子どものウェルビーイングをどのように保障しているかである。ウェルビーイングとは、子どもが栄養面や衛生面で充実した環境にあり、安心して心地よい状態に置かれていることである。その子どものウェルビーイングの状態を良いものに保つために常に子どもの様子をモニターし、国内的にも国際的にも深く可能な形で子どもたちの発達や伸びた領域を見いだすことができるようにしておくことが肝心であるとされている。

また、子どもに関する政策は基本的に彼らの未来に焦点を当てなければならないこと、従って子どもへの予算は社会全体の投資として認識されるべきであり、その投資ポートフォリオをどのように改善して

いくつかが課題となることなどが挙げられている。

そうしたポートフォリオを有効に活用するためには、政策決定に関する研究が将来的な政策に影響を及ぼすような形で行われることが求められる。そして、研究によって得られた保育に対する評価は、効果の無い予算を振替えて新たな枠組みを設定して再評価を行うため、また新規の政策への方向付けをするために、前向きに活用されるべきであると述べられた。

しかし、各国に見られるこれまでの一般的な予算の枠組みとしては、乳幼児ではなく、もっと後になってから措置されるものが多く、求めているような効果が得られていないことが考えられる。それに対する方針として、もっと人生の早い段階での投資が必要とされる。具体的には、子どものライフサイクルの早い時期(ここでは出生前の時期からが想定されている)に前倒して予算を割り当てていくことが提案されている。また、経済的・社会的・生得的に不利な状況にある子どもたちが持っているリスクに対する予算というものが必要であり、リスクの状況によって段階的に手厚く支援を行うシステムの構築が、各国の政策として求められる。

子どもたちへの早い時期における支援として、出生前の環境の整備や、出生後の母乳育児の支援、また経済的には出生前後の早い時期から家計収入を支え、その後は徐々に支援の度合いを減少させていくような形が考えられる。こうした出生前後からの段階的なケアシステムの構築や幼児教育を重点的にターゲットとすることがこれからの政策の向かう方向であろうことが述べられている。

避けるべきこととしては、出生前後の初期の援助を過剰に医療に頼らないこと、すでに成功するであろうと予測ができる子どもたちに、遅い段階で予算的に支援すること、また一人親世帯に対して長期間補助金をつけることなどが挙げられている。また、留意して着目しておくべきこととして、アメリカにおいて実施されている二人親家庭を維持するための政策が子どもにどのような影響を及ぼしたか、あるいは世代を超えた不平等の継承がどのように行われていて、またどのように避けられるべきかを解明することが述べられた。

2・ニュージーランドにおける

保育の質と評価の特徴

ニュージーランドの教育は、学びの基礎の強化を謳い、全ての国民に21世紀に生きる市民としての知識・技術・価値観を身につけさせることを目標としている。そのためには、質の高い保育への子どもの参加の増加、小学校での英語・算数の成績の向上、学習障害の子どもたちの早期発見と介入、経済的その他の不利な環境から来る子どもたちへの配慮をしなくてはならないとしている。特に、不利な環境にある子どもたちや学習障害を持った子どもたちがもつギャップは、学校教育を受ける間に広がってしまうことを認識すべきであると主張している。

ニュージーランドでは、保育・教育が一体化されたシステムを取り入れてから20年以上が経過しており、その中で子どもの能力に応じたカリキュラム開発と、児童中心主義に立った教育学が供応している。また、幼児教育においては、形成的評価によって子どもの学びを見取り、伸ばしていく

ような実践が行われている。その評価のあり方は、子どもたちの学びのストーリーをポートフォリオ形式でドキュメンテーションすることによって、質的に見ていこうとするものである。

子どもたちが小学校へ上がる時点では、1年生のリテラシーに関する指導基準があり、教師が彼らを教える際の手がかりとなっている。

保育・教育に関する政策については、実際に保育への投資が教育的効果の平等性を改善するように働いているか、ということが視点となっている。さらに、保育における学びの基礎づくりが評価されることで、質の高い保育へのより多くの投資の必要性を説明することができたり、各園の質の向上に向けて限られた資源を有効活用することができたり、また保育における学びの保障を公平に浸透させることができると考えられている。

そのためには、子どもたちに何ができるのかを正当に評価する方法を開発する必要がある。しかし、子ども一人ひとりのパフォーマンスを評価するということは、教師・保護者・子どもたち自身にとって大きな負担となる。それでも、テスト等による数量的で表面的な評価は比較的簡単に実施することができるのであるが、子どもの能力の変化をどのように深く評価するかという点においては、まだまだ困難な部分がある。そのような評価を可能にするためには、子どもの学びのプロセスを深く理解することが求められる。それを全ての子ども一人ひとりに行うのではなく、代表する子どものサンプルをとり、ケースごとに深く評価するような形がとられている。また、テストといったような量的な評価と、

子どもの真の学びの姿をとらえる質的な評価の両方を使うこと、保育の影響とその評価をすることができるように、そこに影響を及ぼす外的な要因についてのデータを収集することなどが議論されている。

その一つとして、「全国教育モニタリングプロジェクト」が1995年から4年生と8年生を対象として行われている。現在は、これらの試みを1年生と幼児教育段階にまで広げるかどうかを検討されている。これらの評価は子どもたちへの一般的な影響を説明するものであって、この部門への予算的な措置を方向付けたり、保育の投資に関するメリットを検証したりする形では未だ行われていない。

子どもたちがどの程度教育に参加しているかについての出席記録や、後の学業成績については、全国学生番号を導入しているため把握がしやすい。特に出席記録の部分については電子化されている。この学生番号制度を、保育の段階の子どもたちへも拡大するかどうかは現在の懸案でもある。またさらに、教育や保育の成果の評価分析の結果を予算的・経済的なものへ広げていく可能性を探っているところである。そして地域社会そのものが、質の高い保育へのさらなる投資をするような方向へ導いていくことが求められている。

データ収集に関しては、電子化されることで、その規模や正確さ、効率性に大きな変化が現れている。しかし、システムの変化そのものは、学びの豊かな理解に関する大きな変化とは結びついていないのが現状である。

質という点でも、教育全体においても、ニュージーランドの政策は教育の機会均等に対して大きな投資を行っている。その